



法然上人行状絵図第四十二巻第六段

法然上人の御遺骸を西山の栗生野で茶毘にふし奉る

香林

こうりん
 香林山 無量寺
 機関紙 第11号
 発行者 堤 俊海
 香林編集委員会
 久留米市本町 8-4
 TEL0942-32-3010
 FAX0942-32-2701

法然上人のおことば

御法語より

第二十四(別時念仏) 尚モ、ネンゴロニ、ハゲトキドキ別時ノ念仏ヲ修マシ、恵心ノ先徳モクワシテ心ヲモ、身ヲモ、ハシク、オシエラレタリ。ゲマシ、トトノエススム道場ヲモ、ヒキツクロベキナリ。日々二六万遍イ、花香ヲモ、供エタテ七万遍ヲ唱エバ、サテモマツラン事、タダチカラ足りヌベキ事ニテアレドノ、タエタランニ、シタモ、人ノ心ザマハ、イタガウベシ。マタワガ身ヲク、目ナレ、耳ナレヌレモコトニ、キヨメテ道場バ、イライラトススム心ニ入リテ、或ハ三時、或スクナク、アケクレハソハ六時ナンドニ、念仏スオウソウトシテ、心シツベシ。モシ同行ナド、アカナラヌ様ニテノミ、粗マタアラン時ハカワルガ略ニナリユクナリ。ソノワル、イリテ、不断念仏心ヲススメンタメニハ、ニモ修スベシ。ス様ノ事時々別時ノ念仏ヲ修スベハオノオノ様ニ随イテ、キナリ。シカレバ善導和ハカラウベシ。

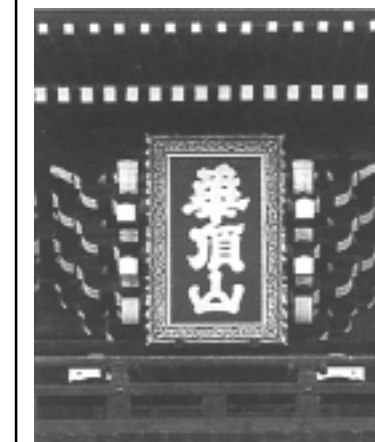
浄土宗総本山 京都 知恩院
 第二十五番 おん いん

京都市東山区林下町 400

(開基) 法然上人
 (本尊) 元祖法然上人
 (御詠歌) 草も木も枯れたる
 野辺にただひとり松の
 みのこる弥陀の本願

念佛の根本道場

知恩院は、法然上人によって開創された念佛の根本道場である。上人が往生の素懐を遂げられた霊跡で、浄土宗の総本山として崇敬を集めている。
 法然上人が「あとを一廟にしむれば、遺法あまねからず、予の遺跡は諸州に遍満すべし」と偉大な聖訓を遺された。しかし上人を



法然上人の臨終
 法然上人が帰洛を許されたのは、『御臨終日記』によれば、建暦元年(一一二一)十一月十七日であった。勝尾寺を発った法然上人は遠流を含めておよそ五年ぶりに京都へ帰ることになった。大谷の禅坊(現在の御影堂あた

敬慕するものの表情禁じ難く、知恩報恩のため、また不滅の大法たる念佛法門流布の拠点として、堂塔伽藍を整備されていた。
 勢観房源智上人は、上人の遺骨を奉じて、ここ大谷吉水の霊跡に御影堂・佛殿の工を起し(一一三四)、四条天皇はこれを賞せられて、廟堂には知恩教院、佛殿には大谷寺、総門には華頂山の勅額を下賜せられた。かくして専修念佛の本拠に、上人御入滅の霊跡は、永くこの地に標ざるに至ったのである。

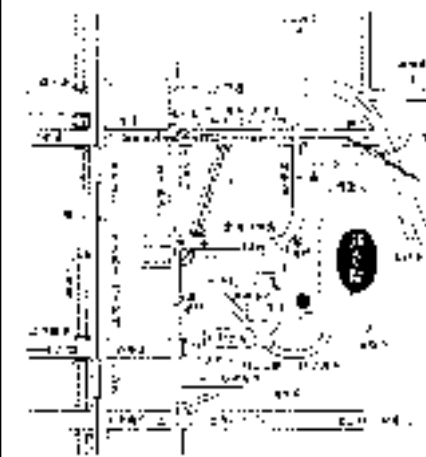


り)に入られようとしたとき、既に七十九歳の老齢である。禅坊は住居としては適せず、そこで青蓮院の慈円僧正に申し出て、山上の坊(現在勢至堂あたり)を法然上人は最後の住居とされた。これが知恩院の創まりである。
 建暦二年正月二十五日、念佛の声弱まり、いよいよ臨終が近くなったとき、慈覚大師より相伝の九条袈裟を着し、光明遍照を誦して示寂された。享年八十歳であった。

堂塔の造営

江戸時代は、徳川家康公が浄土宗に帰依した。知恩院に対しては、生母伝通院の追善著提のために堂塔伽藍を造営し、

二代秀忠公が三門および大殿、経蔵を建立したが、寛永十年(一六三三)の火災で大殿が焼失。三代家光公の代に堂塔を再建して現在の基礎が創られた。
 今、知恩院は七万三千坪の境内に、大小百六棟の堂宇が建ち並ぶ。そのうち一門、御影堂、大方丈、小方丈、唐門、勢至堂、経蔵は国の重要文化財に指定されている。
 庭園は小堀遠州好みの作庭で、京都市指定名勝。また七不思議も有名である。方丈の襖や板戸の絵は、狩野尚信、信政、定信の名手になる。その他おびただしい数にのぼる貴重な宝物類が所蔵されており、まさに文化財・美術品の一大宝庫というにふさわしい。なかでも『法然上人行状絵図』は『勅修御伝』と称し、四十八巻の大絵巻は、後伏見上皇の勅命によって制作された国宝である。
 四季を通じて全国各地より拝観の人が絶えない。



ともに生き 皆ともに往き ともに会う



平成10年、浄土宗を開かれた法然上人が、浄土宗の根本宗典である「選択本願念佛集(せんちやくほんがんねんぶつしゅう)」を選述されて800年を迎えます。

選択本願念佛のこころ

大本山増上寺法主

藤堂 恭俊台卜

ま事にこの身には道心なき事とやまひばかりや なげきにて候らん。世をいとなむ事なければ 四方に馳走せず。衣食ともにかれたりといへども 身命をおしむ心切ならねば あながちにうれへとするにをよばず。心やすくせんためにも すて候べき世にこそ候めれ。いはんや無常のなしみは目のまえにみたり。いづれの月日をか をわりの時に期せん。さかへあるものもひさしからず。いのちあるものも 又うれへあり。すべて

いとふべきは六道生死のさかひ。

ねがふべきは浄土菩提也。

天上にむまれて たのしみにほこるといへども 五衰退没のくるしみあり。人間にむまれて国王の身をうけて 一天下をしたがふといへども 生老病死 愛別離苦 怨憎会苦 一事もまぬがる事なし。たとひこれらの苦なからんすら 三悪道に返るをそれあり。心あらん人は いかがいとはざるべき。うけがたき人界の生をつけて あひがたき仏教にあふ。このたび出離をもとめさせ給へ。(要義問答より)

意識

本当のところ、人としてただ自分の肉の身を養い、そのうわべを飾ることがあつても、心を養うためにほとけの道を歩む心がけない事と、心ならずも自分の身をむしばむ病いと、溜息のほどなげかわしく思われる。

これといった生涯を賭した目標を持たないままに、実現をめざ

して、あれこれと身を粉にして

走りまわることをしてない。衣食

ともに不十分であつても、わが身を大切にし、わが心をいつくしむというさし迫つた心が湧きたつことがないから、かならずしも憂いとする何ものもないわけである。

何の気遣いもなく落着いて、心のどかに平安であるには、この世に対するとらわれの心こそ、厭い捨てるべきである。まして自分の身の上に無常の悲しみは刻々に迫り、目の前に満ちみちて、終焉の日がいつ訪れるか予測できない。栄枯盛衰といわれ

るように、都合のよいことはいつまでも続かない。人のいのちもまた同じであり、決して長らえることはない。遠ざけ捨てるべきは欲に溺れ、怒りの炎に焼かれながら、生き死にを繰り返るげの流浪の身である。願ひ求むべきは阿弥陀仏のみ許に里帰りし、いろいろお導きを頂き、さらにこの生き死にの世界に舞いもどつて、縁ある人も縁なき人も共に導いて、阿弥陀仏のみ許

に連れもどすことである。

天上の人として生まれ、快樂に浸つていても、終の時には五種の衰えが身に現れ、苦しみを感じなければならぬ。また、人の子として生を享けて国王となり、天下に号令をくだしても、生老病死の四苦、愛する人と別離する苦しみ、怨みにくんでいる人と会う苦しみなど、何ひとつとして逃れられない。たとえ、それらに苦を感じないとしても、人生の終わりににはそれよりも更に重い苦しみを受ける地獄、餓鬼、畜生の三悪趣に陥ること必定である。

こころざしのある人は、生き死にを続けて流浪をかさねることを、どうして厭い離れないのであるうか。容易でない人の子に生を享け、めぐり会うことの稀な仏の教えに会い得たからには、なんとしても、生涯を賭して生き死にを続ける流浪に訣別を告げ、厭い離れなさい。

仏事のQ&A

Q 戒名はそもそも生前

にいただくのがよいと聞きまして。戒名にはどのような意味があるのですか。戒名をいただくにあたっての心得を教えてください。

A 家族のどなたかが亡

くなると、真っ先に気になるのが戒名です。愛しかった方、尊敬していた方のこれからの呼び名が戒名だとすれば、なるべく立派なものにしてあげたいというのが人情でしょう。

しかし戒名は、ほんとうは死後の呼び名ではなく、生前信仰に入つたしるしとしていただく、仏教信者としての名前なのです。

お師匠さまを決め、これから仏教を信する者、浄土宗の信者としての生活をいたしますということを表すために、いままでの太郎とか花子とかいう名前はお師匠さまにお納めして、改めて信者の仲間に入れていただく証

拠が戒名なのです。仏教信者としての生活には当然、よいことをしよう、悪いことはするまいという道徳的な態度が求められ、それを戒というので、それにのつとつた生活者の名前、戒名が授けられるのです。

浄土宗では、南無阿弥陀仏のお念仏の中にすべてがこめられているとします。ですから、お念仏を称えることによつて、罪深い几夫であるうとも阿弥陀さまの極楽浄土に引きとられて、なにか一つ思い煩うことなく仏となる修行ができるのだという筋みちを教えていただくためにも、できるだけ早いときに授戒を受けて戒名をいただき、浄土宗信者としての生活に入るべきなのです。

いや、よつは心がけが肝心で、気持ちさえあれば名前なんかどうでもよいと考えるのは、人間性に対する反省の足りない考え方です。授戒会に参加して、改めて戒名をいただくと、不思議と昨日までの自分と違つた、新たな気持ちになつてい

づきます。

授戒会は本山などで毎年行われますが、別に大がかりな授戒会でなくても、あなたのお寺でこ住職にお願ひして授戒の儀式を行つてもらうことは日常でもできることです。

静かなご本堂で阿弥陀さまのお出ましを願ひ、ご住職と差し向かいで「仏教を信じます。お念仏を称えます」とお誓ひしてごらんなさい。死んでから追いかけて入信のしるしにおかみそりを

あてていただくまねをしたり、授戒会の略したのをやっていただくより、生きてい

る充足感、ずつと気持ちがよくてありがたいものです。

これで戒名は本来入信のしるしとしていただくものだから、生前にいただくのがよいというところが分かりでしょう。

ちなみに、戒名は本来「一字」のもので、その後につく院号や居士号などは、いわば敬称の類です。念のため。

おしゃかさまのお誕生日をお祝いする

花まつり稚児募集のご案内

おしゃかさまのお生まれになられた日をお祝いいいたしましょう。

つぎのように およろこびの行事をします。

記

- 1.とき 4月4日(土)午前10時集合
- 2.ところ 花まつり式典会場 寺町千栄寺
- 3.稚児行列 千栄寺にて式典後寺町を行道
- 4.バザー 午後1時より
- 5.甘茶接待 4月3日(金) 順光寺、サンロード、あけぼの一番街
- 6.申込金 稚児1名 3,000円 (貸衣装代と記念品代を含む) 申込用紙は市内各寺院にあります。